

# 沖縄のさんご礁再び



彩り豊かなサンゴの群生が広がる慶良間諸島・阿嘉島の海底



サンゴの増殖が行われているか。外敵の魚から守るため、網でふたがしてある



## 阿嘉島臨海研究所

沖縄本島の西方約四十キロ。彩り豊かなサンゴの群生が広がる慶良間諸島の一つ阿嘉島で、阿嘉島臨海研究所(所長・大森信東京海洋大名誉教授)がサンゴの人工増殖の研究を進めている。十年以上にわたる研究で、サンゴが岩盤に付着するのを促すホルモンを発見。これをきっかけに増殖技術が飛躍的に前進し、白化現象や乱開発で失われたつるあるさんご礁の再生にもつながるとして期待されている。(写真グループ・岩崎拓郎)

生息に多くの謎を残すサンゴの一生は、五月ごろから満月の夜に起こる二斉産卵から始まる。海中に卵と精子が放出され、受精卵はアラマツと呼ばれる幼生になる。その後、ついでのみかである浅瀬の海底岩盤に付着して、ポリプへと変態するが、そうなるのはごくわずか。多くは魚に食べられたり、岸に打ち上げられる。

## 岩盤付着促すホルモン発見

## 人工繁殖 試み進む

同研究所は、今後は、人工増殖させたサンゴをいかに自然の岩盤に移植するかが課題になる。これをクリアすれば、沖縄などの海から失われたさんご礁の復活も夢ではないと話している。



稚サンゴは、同島の港内に設けたいかたからロープでつるしたかごの中で生育中。かごはフナイなど外敵の魚から守るため、中にはサンゴの生育を妨げる藻を食べる貝も入れている。こうした手法も増殖の新技術として注目を集める。